（社）東洋音楽学会関西支部

支部だより　第５号　(1990-01-25)

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

定例研究会についての御案内

関西支部　第147回定例研究会

時　1990年 2月17日(土)　14:00～16:30

所　神戸大学教育学部　音楽棟　C－111教室（交通機関などについては第４面）

担当　岩井正浩(会場)、　難波正(司会)、　長方正博(懇親会)、
廣井榮子(ビデオ記録)、　南谷美保(企画調整)

プログラム

14:00－14:40　研究発表

「花取り踊り」の伝承

－高知県四万十川流域を中心に－　　川井　伸子

15:00－16:30　特別企画［レクチュアー・デモンストレーション］

韓国伝統音楽の本質

演奏：KIM Bae Kyong 金景培（Kyongbuk National University 慶北大学校藝術大学助教授。人間文化財傳修者。）

講演&演奏：Byong Won LEE 李秉元（University of Hawaii at Manoa）

通訳:志村哲男

内容:雅楽(アクア)・時調(シジョー)・玄琴散調（コムンゴサンジョー）

18:30　懇親会　於　三宮駅前「寿里庵〔じゅりあん〕」（鍋料理）

※懇親会は予約制のため出席御希望の方は必ず御連絡下さい(詳細は第４面)。

今後の研究会開催予定および発表の公募について

第148回	1990-04-14	京都教育大学	発表申込締切　1990-02-15
第149回	1990-06-02	関西学院大学張記念館	発表申込締切　1990-02-15
第150回	1990-09-08	岡山市内	発表申込締切　1990-07-10
第151回	1990-11	大阪府内	発表申込締切　1990-07-10

◆発表申込方法　連続講座、フリーの区別、発表の種別（研究発表、調査報告、資料紹介、研究演奏など）、発表題目、使用希望機材、希望日、氏名、連絡先を、葉書に明記のうえ、下記宛て御送付ください。申込多数の場合など、必ずしも御希望に添えないこともあります。

〒560　豊中市待兼町1-1　大阪大学文学部音楽学研究室気付「TOGKS例会係」山口修

連続エッセイ『音楽の「しるし」と「ことば」』

(19) 「全絃神速反覆」・「アルペッジョ」

仲　万美子

ある一つの文化が、異なる文化と出会った時に、双方で理解の試みが始まる。そのやり方は、自国の文化が持っている同類のものを土台にして借用される場合が多い。しかし、そこに微妙なずれが生じるのは止むを得まい。

西洋音楽の「楽語」の置き換え作業では、日本と中国ではすこし異なっているように思う。日本の明治10年代の楽書には『西洋音楽小解』〔瀧村小太郎が、清国の『西国楽法啓蒙』(1872)に準拠して『チェンバー百科事典』等の楽語を抄訳、手稿本、1880〕や『楽典』〔J.CALLCOTT著、神津元訳、1883〕等がある。たとえば、「arpeggio」は、前者では「次第具音」、後者では「全絃神速反覆」と訳出された。一方、中国では、現在「琵音」と訳されている。琵琶の奏法、「琵（楽器の絃を手前から前方に弾いて鳴らす：廣韻)」や「琶（楽器の絃を上から下に引き鳴らす：集韻)」からおそらく借用されたのであろう。この訳語をみると、日本では当時、翻訳作業の過程で、「目」に映った演奏の風景を模写したことが想像される。そして身近な楽器の奏法を借用するのではなく、結局、現在ではカタカナ表記に定着している。百年も経過すれば、箏の「裏運」「流し爪」の双方の説明に「爪裏を利用する一種の下行グリッサンド」や「巾と為をアルペッジョに弾いて、そのままグリッサンドして指定の弦に至るが…」といった具合いに、自国の楽器の奏法に西洋の奏法のカタカナ表記の西洋楽語を使用するほどになる。

このような西洋音楽用語は共通理解の地平におかれて、それが自然に受け入れられている現状は、考えてみれば驚異的ですらある。ともあれ、現在、多くの研究者によって幕末から明治初期にかけての楽語創成に関する研究がすすめられている。いずれは、そこから自国の文化に対する当時の考え方の体系が読み取れるようになるであろう。

(20) 「カイロノミー」

永原　惠三

音楽が視覚的なかたちに変換されるのは、楽譜においてだけではない。身体運動にも楽譜的な機能を見てとることができ、「カイロノミー」がその典型である。カイロノミーは主として手の動きによる指揮を意味し、指揮棒を用いる近代の指揮法と区別される。西洋近代音楽における「タクトを振る」指揮は、基本的には叩く動作を中心にしてリズムを明確にし、拍の概念の中で音楽を形成する。まずそこにあるのは数の概念であり、小節線をふまえた最初の数としての１への回帰である。この指揮法は、多声音楽および器楽の発達さらに近代オーケストラの誕生に伴って必然的に発達したものである。

それに対してカイロノミーはグレゴリオ聖歌のように自由リズムをもつ音楽に適し、教会を中心に声楽で発達して11世紀以降の多声音楽においても重視された。近代ではグレゴリオ聖歌のソーレム唱法の指揮に用いられている。これはタクトの叩く直線的運動ではなく、円運動や曲線運動によって形成される。周期的回帰的１の概念の繰り返しである数的リズムではなく、無からはじまり無へと帰っていくその道程の中での自由に増殖しつつある動きを示すのである。また元来足をあげることのアルシスと下げることのテシスの両概念を中心にして、速さ、強さ、音の連なり、上下等を示す。ここで重要なのは、カイロノミーが手の運動に伴って生ずる息の流れやそのエネルギーをも導き、指揮者と歌唱者との共空間を現出するということである。これは近代のタクトによる指揮法にも、カイロノミーという言葉としてではないものの、手の動きというその本来の概念の中に盛り込まれ、一人の芸術家としての指揮者の存在にとって重要な要素となっているといえる。カイロノミー的人間行動は、東洋を含め多くの音楽文化で観察されるという。比較研究がまたれる。

連続エッセイ『音楽の「しるし」と「ことば」』

(17) 「関節」と「曲の中の節目」

田井　竜一

ソロモン諸島のマライタ島南部に居住しているアレアレ the 'Are'are の人々は、精緻なパンパイプス合奏をおこなうことでよく知られている。

このパンパイプス合奏における用語の一つに、ro'u mani 'au というものがある。直訳すれば、「曲の中の節目」といった所であろうか。パンパイプスの合奏音楽は、主に音の高低の動きのパターンが組み合わさってできているが、ro'u mani 'au は二つの結節点に挟まれたそれぞれの短いパターンをさすのである。そもそも ro'u とは、ro'uro'u("肘")から派生した言葉で、何か長いものの「折り目」や「継ぎ目」を意味する。

H. ZEMP によれば、ro'u mani 'au の概念は、折り曲げられた紐や、地面に書かれた平行線によってあらわされる。また練習や試し吹き(hako 'au)の際には、パンパイプスの吹き口の上で、人指し指を動かすことによって示されることもあるという。ZEMPはこれを譬喩的な表現としているが、果たしてそれだけであろうか。

1988年12月に、私はソロモン人のスタッフと共に同地を訪れて収録をおこなったのだが、その時レパートリーの大半が、鳥や動物の声、雷鳴などの自然の音、病人のうめき声やいびきなどの人間が出す音、蜘蛛や鼠の動きまわる様や人間の動作などを題材にしていることに気づいた。これらは生態環境の諸現象から受ける聴覚・視覚的イメージを、パンパイプス合奏という聴覚的イメージに転移したものということができよう。アレアレの人々にとって、聴覚的イメージと視覚的イメージは互いに容易に置換して表現可能なもののように思われる。ro'u mani 'au をめぐる諸々の事柄も、そのひとつのあらわれといえないであろうか。

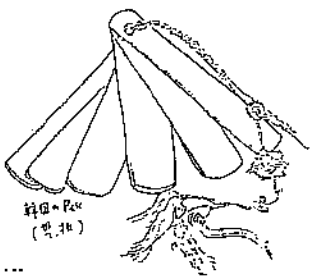
(18) ● 百と拍子

橋本　曜子

雅楽ではチラロルなどという仮名譜の右横に、所々大きな黒又は朱の丸、場合によっては百という字が書いてあります。これは太鼓が強打される場所で、図ドンと入って百ドウと打つ習わしからドウと呼ばれます。この太鼓の場所が合奏の基準となる合わせ所で、別称「拍子」ともいいます。催馬楽や神道系の東遊・久米歌などでは、主唱者は一対の木片ら成る「笏拍子」を持ち、その役を「拍子」といいます。打ち方に決まった型があるのですが、その終りにも百と記されています（これはヒャク）。

元来、「拍」は全く擬声的な文字で、声符の白と手偏が合わさって『手を打つ音』を表わしますが、既に中国古代に楽器(拍子木)を示すものとして使われています。「子」は十二支で繁殖を示す如く、「拍子」というと音が何回も打ち鳴らされることとなります。

ここで思い起こすのは、平安から鎌倉にかけて流行った女芸人、白拍子です。白装束で鼓を小脇にという絵図も残っていればソウカと思い込んでしまいますが、この「拍子」はドンドン足を踏みならすこと、「白」は「素(白)声」とも通ずることから地声を張りあげて歌うこととすれば、かなり逞しいものに想像できます。能にあっては、四拍子とは能管・小鼓・大鼓・太鼓という楽器群のこと。つまり、拍子とは総じて打つ音ではっきりとメリハリをつける楽器やそれを担当する人をさすようなのです。その相手とされるのは長々と続くうたや笛のふしであり、これらもそれだけでは収拾がつかず、ここぞという所で打ち入る音との培坑作用で初めて合奏が成り立つように思うのですが……



第147定例研究会　会場への交通機関の案内

神戸大学教育学部　音楽棟　C－111教室（〒657 神戸市灘区鶴甲3-11、☎078-881-1212

① 阪神御影、ＪＲ六甲道、阪急六甲のいずれかで下車。　(内)7237

② 神戸市バス３６系統(鶴甲団地行)で、教育学部前下車。

③ 正門を入り、左にまっすぐ行って、つきあたり左側の棟です。

④ タクシーは、それぞれのバス停(ＪＲ六甲道は南側)でひろえます。
(阪急六甲よりの所用時間５分)

懇親会について

◆場所　「寿里庵(じゅりあん)」　(「コトブキ三宮ビル」６Ｆ　☎ (078) 391-8681)
☆阪急三宮駅の西出口を出てすぐ北側の道路を隔てたビルです。

◆参加費用　５０００円程度

◆参加御希望の方は……

必ず２月１０日までに葉書または電話にて、関西支部(相愛大学 ☎06-612-5900 内線331)尾野まで御連絡ください。

完全予約制のため申込締切厳守、申込後の変更は前日までに (078) 621-8002 長方まで。

支部通信について

編集担当　南谷美保

『支部だより』第５号をお届けします。多くの方の原稿をいただきありがとうございました。原稿は手書きでも結構ですが、パソコン等ご使用の場合は、MS-DOSテキスト形式で保存したフロッピー(5インチまたは3.5インチ2HD) もお送りいただけると、たいへん助かります。今後の発行予定は次の通りです。

第6号 1990年 3月下旬 (4月・6月定例研究会案内)　原稿締切　2月15日

第7号 1990年 8月下旬 (9月・11月定例研究会案内)　原稿締切　7月10日

支部関係の問い合わせ先

総務関係
〒585 大阪府南河内郡河南町東山　大阪芸術大学音楽学研究室 ☎0721-93-3781 内線539
月溪恒子・幸野智子　火・水・金

機関紙関係
〒565 吹田市千里万博公園10-1　国立民族学博物館　☎06-876-2151
藤井知昭　水・木

定例研究会・支部だより関係
〒560 豊中市待兼山町1-1　大阪大学文学部音楽学研究室　☎06-844-1151 内線3251
山口修　月・木・金

入会等のお問い合わせは、(社)東洋音楽学会関西支部へ
〒559 大阪市住之江区南港中4-4-1　相愛大学音楽学合同研究室内　☎06-612-5900 内線331